

基幹型共同研究プロジェクト

「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」

「東北アジア言語地域の位置付けに向けて」

ホイットマン・ジョン

《研究の概要》

本研究の目的は日本語とその周辺の言語を主な対象とし、その統語形態論的・音韻的特徴とその変遷を、言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することによって、東北アジアを一つの「言語地域」として位置づけることである。形態統語論的観点からは「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て、日本語にも見られる名詞修飾形(連体形)の多様な機能を周辺の言語と比較しながら、その機能と形と歴史的变化を究明する。歴史音韻論の観点からは、日本語周辺諸言語の歴史的音韻再建を試み、東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。平成25年からは、アンナ・ブガエワ准教授が中心となる「アイヌ語班」を加え、日本列島において唯一日本語族と共存するアイヌ語族の言語類型論的研究を積極的に行っている。

共同研究者 4名

《主要な成果物》

- ① Bugaeva, Anna and John Whitman. Deconstructing clausal noun modifying constructions. *Japanese/Korean Linguistics* 23. Stanford: CSLI. 2014. 3月刊行予定。要旨査読制の国際学会の発表論文。
- ② *Proceedings of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL8)*. *MIT Working Papers in Linguistics* 70. Esra Predolac and Andrew Joseph 編。米国コーネル大学と共同プロジェクトが共催した国際学会の発表論文集。中に本プロジェクト「形態統語論班」メンバー及び研究協力者4名(岸本、西山、吉村、金)の論文が掲載。要旨査読制の論文集。

- ③ *Korean Linguistics* 15:2, (オランダ Brill 社) Special Issue on Korean Historical Linguistics. Young-Key Kim-Renaud and John Whitman 編。2014年1月刊行予定。中に本プロジェクト「音韻再建班」のメンバー3名(伊藤(智)、Vovin, Whitman)の投稿論文を掲載(査読付き)。
- ④ Joseph, Andrew, and John Whitman The Diachronic consequences of the RTR Analysis of Tungusic vowel harmony. *Proceedings of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL8)*. *MIT Working Papers in Linguistics* 67, 159-174. Umut Ozge 編。「音韻再建班」の共同研究発表会で発表したツングース諸語における母音調和の検討についての論文。要旨査読制の論文集。

《特色ある活動》

本プロジェクトでは、6回の研究発表会(音韻再建班・形態統語論班・アイヌ語班各2回)の他に、下記の国際シンポジウム・セミナー・ワークショップを行った。

- ① 2013年5月30日第23回東南アジア言語学会(SEALS 23)の plenary 「Going beyond history: Re-assessing genetic groupings in SEA」をタイ・チュラロンコーン大学言語学科と共同で同大学で行った。
- ② 2013年7月30日に早稲田大学でNINJALセミナーとして「自言語による古典語文献の読解」(Workshop on Reading Classical Texts in the Vernacular)を行った。日本の研究者に加え、ヨーロッパの専門家を4人招き講演してもらった。

- ③ 2013年8月23～25日に米国コーネル大学で第9回 Workshop on Altaic Formal Linguistics を行った。形態統語論班のメンバー4人が発表した。
- ④ 2014年2月20～21日に International Symposium on Polysynthesis in the World's Languages 国際シンポジウム「世界の言語における複統合性」を国語研で行う。プロジェクトメンバー5人が発表し、海外の著名な言語類型論学者が7人講演する。
- ⑤ 2014年2月22～23日に第2回 NINJAL Typology Festa を国語研で行う。言語対照研究系の3つの共同研究プロジェクトのメンバーの他に、海外の研究者が5人講演する。

《何が分かったか、何が出来たか》

本プロジェクトは2年目を終えようとしているが、既に「言語地域として」の東北アジアの輪郭が見え始めている。研究発表会、その他の研究活動により、既に下記の成果が得られている。

- ① 伊藤智ゆき氏の研究では、日本語と構造的に類似している朝鮮語のアクセント体系の通時論的起源が音節構造に由来することが分かった《**主要な成果物**》③参照）。
- ② Joseph 氏と Whitman の研究では、東北・中央アジアで一般的だと考えられてきた口蓋母音調和が、実際には複数の語族（ツングース諸語・モンゴル諸語・朝鮮語）において舌根（RTR）母音調和であることが分かった。RTR 母音調和は、その他の東北アジアの言語ではアイヌ語とチュクチ・カムチャツカ語族に観察される。
- ③ 遠藤史氏と長崎郁氏の研究では、日本語特有と思われてきた「係り結び」のような、副助詞と動詞の屈折形（活用形）の間関係を示す文法現象が、シベリアのユカギール語にも存在することが分かった。
- ④ 伊藤英人氏の研究では、「名詞修飾」にしか使われないと従来考えられていた朝鮮語の連体形が、中期朝鮮語以前の段階では「準体言」の機能も有していたことが解明された。

- ⑤ Bugaeva と Whitman の研究では、構造的な区別がないと言われてきた主要部後置型の名詞修飾節における「内の関係」と「外の関係」の間には、アイヌ語・日本語・チュルク諸語において構造的な差異があることが証明された。
- ⑥ 複数のメンバーの研究発表の成果で、日本語史にも見られる「連体形」が「終止形」へと変化していく過程が東北アジア全体で、いくつかの言語（チュルク諸語、モンゴル諸語、ツングース諸語）に見れる現象であることが分かった。

東北アジア言語地域

